

第14回 土佐の皿鉢ゼミ開催

教職実践高度化専攻（教職大学院）の院生の実践研究発表「第14回土佐の皿鉢ゼミ」が、2025年2月11日（火）に開催されました。今回も対面およびWeb会議システムZoomによる同期型オンラインのハイブリッド方式で行われ、82名の方にご参加をいただきました。

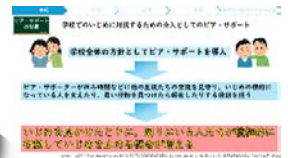
開会式の挨拶では、中野俊幸専攻長より「教育理論は実践方法の選択や決断の根拠であると同時に、実践の効果を評価する枠組みともなる」ことが確認され、皿鉢ゼミは参加者からの評価や省察を得る貴重な機会であることが述べられました。閉会式の講評では、高知県教育委員会小中学校課課長補佐の伊吹竜二様より「発表された研究は高知県の教育課題を解決するものであり、広く周知していただきたい」との期待が述べられました。また、第5期修了生の渡邊莉都さんは「大学院での実践研究成果を現場に還元できているか、改めて考える機会となった。これからも教育現場で先生方と共に頑張りたい」と抱負を述べられました。最後に藤中雄輔附属学校教育センター長から『学ぶ』とは、人生を豊かにし、多くの人に充実感を与え、心の中に生き続けられるようにすること」という、学びのあり方について示唆に富んだコメントをいただきました。

本紙では、各会場で発表した院生のそれぞれの研究における成果や課題と、各コースのテーマ別協議での活発な議論についてご紹介します。

【学校マネジメントコース】

M2 赤崎浩平さん 不登校の未然防止に向けた協働体制の充実・ピア・サポートに焦点をあてて

ピア・サポートに焦点をあて、新規不登校を生まない協働体制の充実に向けて研究してきました。その結果、ピア・サポーター養成講座を受講した生徒によるピア・サポート活動は、生徒の友達支援意識の向上、及び主観的健康感の向上に寄与する可能性が示唆されました。



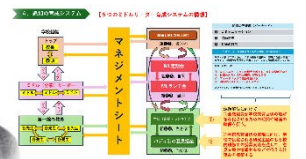
M2 大勝由美さん 協働意識を高めるチーム学校づくりの改善方策-学び合い高め合うメンター制の構築-

校内のメンターチーム会に焦点を当て、メンタリング機能を活かした研修プログラム「お悩み解決会」を導入し効果を検証しました。このプログラムがメンティ及びメンターにとって教育実践に直結して自分事となり、学校組織全体の協働意識を高める仕組みになり得ることが示唆されました。



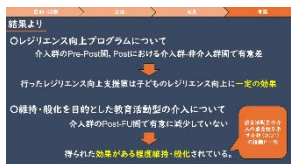
M2 川村浩二さん 学校組織マネジメント力を発揮する協働体制づくり-組織力を高めるためのミドルリーダーの育成について-

学校の組織力向上のため、ミドルリーダーの校内育成の方策について研究を進めてきました。そこで、ミドルリーダーによる定期会・ランチ会・教頭との個人ミーティング・学年（定期・ランチ）会・バディ制の互見授業を行いました。これらの取組が育成システムとして一定の効果的な機能を発揮しました。



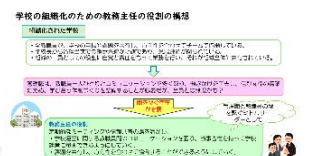
M1 秋澤和希さん 学校教育における生徒指導上の諸課題への教師の手立て-レジリエンス向上に焦点を当てて-

生徒指導上の諸課題の多くに共通すると想定されるレジリエンスに焦点を当てて、レジリエンス向上支援策を検討し、生徒指導に役立たせることを目的として研究しています。行ったレジリエンス向上支援策はレジリエンス向上に一定の効果があり、その効果はある程度維持・一般化されたことが示唆されました。

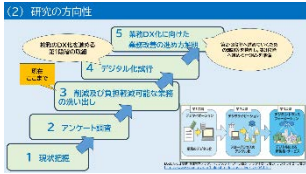


M1 上田稚子さん 教務主任の学校組織への効果的な関わり方について

教務主任の役割の明確化と役割を発揮するための校内の環境や組織の在り方を検討し、そのための方策を試行することで、学校の組織化のための教務主任の役割について解明することを目的とし、研究を進めています。教務主任がリーダーシップを発揮するための取組として学年主任会の運営を構想しました。



M1 氏原千恵さん 業務の効率化・削減により教育の質を高める学校経営-実習校の実情に即した業務の効率化・削減の手法を探る-



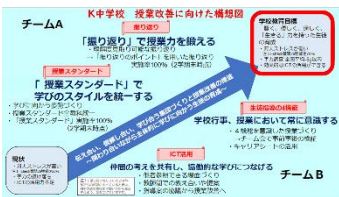
実習校の教職員が具体的に業務において負担と感じている内容についてアンケート調査を行い、削減あるいは負担軽減が可能な業務を全教職員で洗い出し、今後の校内の取組となる実現可能な校務のデジタル化について研究を進めます。また今後の校内の業務DX化に向けた課題分析も行います。

M1 岡野秀哉さん 不登校未然防止のための‘魅力ある学校’について-児童の主観的健康感における意識調査より-

小学生の不登校要因と考えられる「主観的健康感の低下」と「対人不安」に対しアサーション・トレーニングを実施し効果を検証しました。「自己信頼」「対人不安」「主観的健康感」に相関があり、実施後「自己信頼」は有意に向上し、「対人不安」は改善傾向を示したことから不登校予防への有効性が示唆されました。



M1 田村佐緒里さん 中山間地域における小規模校の学力向上に向かう組織の在り方-研究推進委員会の円滑な運営を目指して-



本研究では「授業改善に向かう構想図」にもとづき授業改善を組織的に推進する際の研究推進委員会の 役割の明確化と、そうした役割を發揮するための校内環境や学校組織の在り方を検討し、具体的な方策を試行することで、学校の組織化のための研究推進委員会の役割について明らかにしていきたいです。

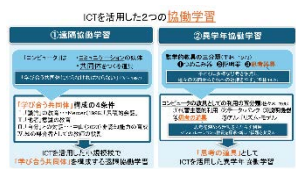
【授業実践コース】

M2 田内南央さん 考察・構想・表現する歴史的分野の授業の研究

中学校社会科の歴史学習において、生徒が歴史を学ぶ意味を見出し、興味・関心を高めるとともに、「過去の社会の在り方を選択・判断し、現代や未来の社会を構想する力」を育むことを目指しました。そのために、日本中世史を題材とした構想型歴史学習の開発・実践・分析を行いました。



M2 樋口桃子さん 複式学級における協働的な学びの促進を図る ICT 活用



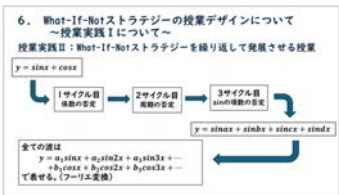
小規模小学校における学習指導上の問題改善に向け、協働的な学びの実現をめざし、①「学び合う共同体」を構成する遠隔協働学習と②「思考の道具」としてICTを活用した異学年協働学習の二方向から協働学習の研究に取り組みました。単元構成や授業デザインを開発・実践し、教育的効果を検証しました。

M2 安田直子さん 道徳的判断力を高める話し合い活動の在り方

道徳的判断力を高める道徳授業は、道徳的な葛藤や相違点に基づく討論課題を設定し、他者の考えと比較しながら討論を行い、視点の広がりや道徳的価値の多様な側面に気づかせる中心発問や問い返しを交え、導入時と比較して自身の思考の変化を振り返ることができる場を設定する一連の学習活動だと言えます。



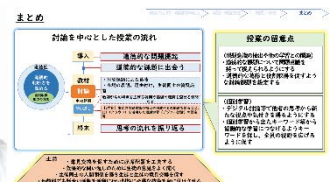
M1 澤田浩介さん 問題設定による深い学びをめざした数学授業の研究 -What-If-Not ストラテジーを基にした授業デザイン-



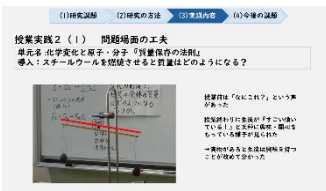
高校数学授業で創造的態度を養うために、問題設定の活動を取り入れることを研究しています。What-If-Not ストラテジーの5段階に沿った授業(2つの円の交点を通る円)や、What-If-Not を繰り返すことで数学を発展させる授業(フーリエ変換)を考案し、実践研究を行いました。

M1 中村大助さん 道徳的判断力を育む手立てと道徳的環境との関連に関する研究

道徳的判断力の発達に着目し、討論を中心とした授業を実践しました。道徳的判断力を高める授業について、土台や留意点を明らかにすることができました。さらなる効果を生むために、今後は集団の道徳的環境へのアプローチも行っていきます。



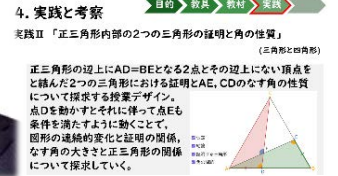
M1 西村朋花さん 生徒が主体性を発揮する中学校理科の授業デザイン



実践を通して生徒の興味・関心を高めるには教材の工夫が大切であることが分かりました。既習事項とのギャップを生じさせ、理科の有用性に気付かせた授業は生徒の肯定群が高くなりました。生活と関連した課題設定を行い、仮説の設定を課題とした授業で、生徒は見通しを持つことができ主体的に参加できました。

M1 藤井圭介さん ICT を活用した数学科の授業デザインの研究-生徒の動的操作を通して-

ICT を数学的教具として用いて生徒が主体的に操作して課題解決をするための教材開発と授業デザインの研究をしています。後期では新たな教材を加え、2年生で5回の実践授業を行いました。次年度はICTを活用した数学的教具の意義を示し、それを活用して、より効果的な学習指導法を提案したいと思います。



M1 松本恭也さん 科学的に探究する力を育てる高等学校理科の授業構想

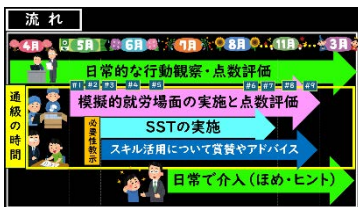


生徒同士が対話を通じて互いに学び合い、理解を深める（建設的相互作用）ことができる授業の構築について探究し、本研究では、協働的な学びとして生徒同士の対話の過程に着目し、科学的に探究する力を育てる高等学校理科の授業構想を行うことを目的としました。

【特別支援教育コース】

M2 井上郁子さん 英語学習に困難のある生徒への効果的な支援方法の研究

言語面と心理面の複数のアセスメントから個々の実態を把握し、困難性のある2nd ステージ支援対象生徒を抽出し、認知特性に応じた支援・指導を実施しました。一斉授業において2nd ステージ支援対象生徒を設定し、授業を行うことはユニバーサルデザインの授業を進める上で有効であることがわかりました。

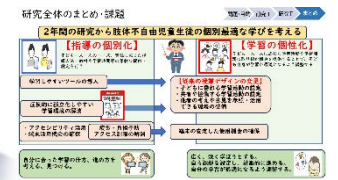


M2 小野哲史さん 高校通級における進路支援-職業準備性の獲得へ向けて-

高校通級でのSST及び模擬的就労場面でのシミュレーションと通級外での介入（賞賛やフィードバック等）の実施が、就労に関わるソーシャルスキル（目上の人への適切な声かけや用件をメモすること等）の形成と日常環境における活用に及ぼす効果について検討しました。

M2 杉元健太さん 肢体不自由特有の学びにくさの改善に向けた指導・支援-ICT活用を中心においた個別最適化学びの実践-

肢体不自由児の学習の困難さ改善に向けてICT活用を進めたことで、①アクセシビリティの活用により、端末の操作力が向上するとともに、学習の困難さが軽減しました。②ICTツールを用いた主体的・協働的な学習活動の導入で、児童と授業者の授業中の行動や児童の授業に向かう意識が肯定的に変化しました。



M2 安岡知美さん 知的障害特別支援学校における金融教育

金融教育は知的障害者にとって単なる知識の習得にとどまらず、実生活での自立や社会参加を支援する重要な役割を果たすものです。研究を通して金融教育のカリキュラムを作成しました。様々な学習で金融教育の視点・要素を取り入れ、豊かな人生のための学びとなるよう今後も進めていきます。



M2 山沖智子さん 教員の気づきから生徒の特別な支援へ繋げる体制の充実

教員の気づきを可視化し、生徒の教育的ニーズを把握する「10分会議」の実施と授業UDと学習のオプションを取り入れた授業実践の結果、教員間の情報共有が進み、生徒理解と支援の具体化が促進されました。授業実践では生徒の学習意欲が向上し、授業の参加と理解が促進する効果が示されました。



M1 一谷七菜さん 高等学校における認知特性に応じた授業方略の研究

学習進度や認知特性の多様性に対応できる授業づくりを目的に授業改善を進め、さまざまな支援案をオプションとして生徒に提示した上で、単元内自由進度学習を想定した授業実践を行いました。その結果、生徒の学習に対する自信が向上し、授業参加率が上がったことから、一定の効果があることが示唆されました。



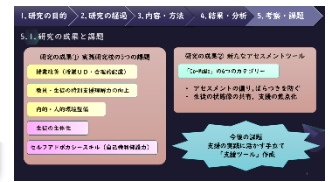
M1 濱田久司さん 特別支援教育の視点に立った全員参加の学級経営

小学校の通常学級における特別支援教育の視点に立った授業改善を行いました。通常学級においてユニバーサルデザインの5つの工夫を取り入れた授業改善は、『子どもと子ども』、『子どもと学び』をつなげ、授業参加率を高めたり、自分の考えを深めたりする手段となることが示されました。



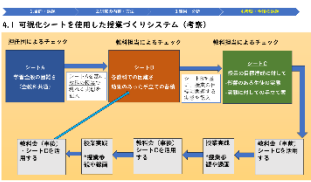
M1 濱田宏美さん 高等学校における特別支援教育のための支援ツール作成

質問紙調査により生徒と教員の授業における困り感を調査し、障害名に囚われず、多相的・多階層的に支援を検討でき、適切なフィードバックを行える新たなアセスメント、特別支援教育総合研究所が開発した「Co-MaMe」を活用することにしました。今後は支援の実践に向け、「支援ツール」を作成していきます。



M1 溝渕優希さん 生徒の特性に応じた授業改善を目指して-教科会による見立てと手立ての共有-

生徒の実態に即した授業づくりを目指して、生徒の実態や手立てを可視化するツールを活用した教科会のシステムを研究しています。今年度は3種類のツールを作成し、それらが教科会で効果的に活用できるかどうかを検証しました。来年度はツールを活用した教科会の効果を検証していきます。



【各コース別・テーマ別協議内容】

【学校マネジメントコース】「持続可能な若年教員の確保とキャリア形成について」のテーマで、院生8名及び大学院の先生方と協議を行いました。学生が教職を選ばない理由として、多忙感が挙げられました。また、教育実習で教員の大変さを実感し、別の職業を選択するケースも多いことがわかりました。若年教員確保には、意識改革と業務の効率化が必要とされ、メンター制での若手のサポートや、業務のDX化の必要性が指摘されました。教職の魅力を持続しつつ、学生の不安を軽減することが重要との意見が挙げられ、これらの取組を通じて、持続可能な教員確保が必要であると話し合いました。

【授業実践コース】協議のメインテーマを「授業におけるデジタル学習基盤の効果的な活用とは？」として、院生からそれぞれ①「活用方法の周知の仕方と教員の負担との向き合い方」、②「教科ごとの資質能力の育成」、③「学校でのPC操作指導のあり方」と問題を提起し、3グループに分かれて協議を行いました。協議後は、①活用方法を県下統一クラウドにて閲覧できればよいのではないかと、②情報活用能力は教科を超えて必要な力であるため、教科特性に応じて使い分けが必要ではないかと、③CBT化すると問えない力はあるもののCBTによって身に付ける資質能力が変わるわけではない、と全体で共有しました。

【特別支援教育コース】前回に引き続き「学校における合理的配慮の提供」をテーマに実施しました。校種別のグループ協議では「家庭学習への取り組みに困難から、宿題の軽減を申し出た子ども」「学級の学習進度と関係なく自習形式で学びたいギフテッドの子ども」という2つの事例をもとに、「どのような合理的配慮が提供できるか」「基礎的環境整備として、何ができるか」という観点で議論が行われました。事例検討を通じて、現場での課題や具体的な取り組み方や、今後の円滑な合理的配慮提供に向けて教員が留意すべき点などを確認することができました。

当日は寒いながらも快晴に恵まれ、院生一同、晴れやかに発表することができました。参加者の皆様から頂いた貴重ご指摘やご意見を、今後の教育実践や実践研究に活かし、さらに知識や経験を深めていきたいと思っております。ご参会いただいた皆様、ありがとうございました。

次回「第15回土佐の皿鉢ゼミ」は、2025年8月19日(火)開催予定です。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 中野俊幸
 編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニュースレター委員
 発行日：2025年3月6日
 事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター
 〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1（教職大学院係）
 TEL 088-844-8457
 E-mail ks33@kochi-u.ac.jp